



10月号

# ひだまり

今月のエッセー

## 思い出の秋



十月になると、秋の深まりが目と肌で直に感じられる時期となります。

私が学んだ小学校では、環境教育の環境として春先に裏山の斜面で里芋やサツマイモなどたくさんの野菜を植えて育てていました。一年生から六年生まで全校生徒が一丸となって行う大行事です。農業のノウハウを知らない児童が行うので先生方はもちろんのこと、保護者の方々の中で、農業に従事されている方の指導のもと、土を耕して泥だらけになりながら野菜の苗を順番に植えていきました。

暑く厳しい夏を過ぎて十月頃になると、待ちに待った収穫時期の到来です。

## 編集後記



秋のお彼岸が過ぎ、冬に向かって季節が動き出しました。

今年も後三ヶ月。気がつけば、「今年、何をしたかなあ。」と振り返るような時期になって参りました。

さて、皆さんはどのような時に過去を振り返りますか？

因みに私は、何かに迷った折に多い気がします。

「過去を振り返るな、捨て去れ」

これは、仏教、とりわけ禅に精通していたステイブ・ジョブズが残した言葉です。

実に、創造的で、未来志向！

iPhone を開発した人らしい言葉ですね。

◆ 田中仁秀

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

春先同様に、収穫作業も全校生徒が一緒にを行います。はじめに保護者の方に農耕機械であらかた掘ってもらい、そこから自分たち児童の出番です。それぞれが思い思いのスcoopを手に取り、獲物の様々な野菜と対峙します。

「よし、頑張つて取るぞ！」

そんな心持で獲物に向かつて一心に掘り進めますが、野菜も生きるためにしっかりと地面に根を張っていてびくともしませんが、悪戦苦闘する中で、いろんな人の力を借りてやつのことで収穫することが出来たのです。

それぞれが頑張つて収穫した野菜を比べあつて、「こつちの方が大きいぞ！」とか「こつちも負けないくらい大きいぞ！」と周りから賑やかな声が秋の空にこだましていました。

秋は「読書の秋」、「食欲の秋」など様々な表現がありますが、私にとっての秋は、小学生だった頃の記憶を呼び起こしてくれ、ノスタルジック（遠い昔を懐かしむ）な気持ちにさせてくれます。

言うなれば「思い出の秋」なのです。

◆ 伊藤正法

## 勘弁

仏教のことば

かんべん

すっかり空が高くなりました。しかし、九月に入ってからはお日さまが顔を出した日は殆どなく、それどころかいくつ来たのか覚えていない程、沢山の台風が列島を襲いました。お彼岸中も殆ど雨。良くて曇り。その間、私は近所のお寺を手伝っていたので、愚図ついた天気はもう勘弁してほしいと思つたのでした。

さて、この「勘弁」という言葉、実は禅語に由来し、本来は考え、わかまえることを言います。

もとを辿れば、禅師が問答を仕掛けることで、相手の素質を見極めること、つまりテストをすることを勘



弁と言いました。その結果によって次の修行の段階へ進むことを許したので、現在一般的に使われているように過失を「許す」意味を持つようになったようです。

さて、辞書の「勘弁」の説明には「堪忍」とも記されていましたが、実はこれも仏教の言葉で、もとの意味は耐え忍ぶこと。「この世」を意味する娑婆という言葉はサンスクリット語の音訳で堪忍土、忍土という意味です。つまり、この世を生きていれば耐え忍ぶことが多いということ。いやはや、もう勘弁して……

◆ 田代浩潤

# 法のお話



一年度  
本田真大

## 初心に帰る

「初心に帰る」という言葉があります。これらの言葉の本当の意味を実感した出来事について書かせて頂きます。

先日、故郷のお付き合いのあるお寺に新しい住職が就任する行事に参加しました。大きなお寺だったので大勢のお坊さんが法要に参加したり、お手伝いに集まっていました。

二日間に渡って行われた式の有終の美を飾るのが法戦式と呼ばれる行事です。新しい住職の下で修行に励む僧侶の中の、「首座」と呼ばれるリーダーに当たる一人が、住職に代わって説法することを許され、問答を繰り広げます。集まった僧侶で埋め尽くされた本堂の

中で一際目を引くのが一人の可愛らしい小僧さんです。最初に首座と問答を交わす「弁事」という役は、しばしば小、中学生位の小坊主さんが務めます。

首座の迫力ある呼び掛けが終わると、いよいよ問答が始まります。可愛くも力強い声が本堂に響き渡ります。

緊張に押しつぶされそうになりながらも必死に大声を張り上げる弁事和尚さんの姿をまっすぐに見る事が出来ない自分がいました。それは彼のひたむきな姿に心打たれただけではありません。

目の前の彼と同じように慣れない着物を着て、頭を丸めて、緊張しながら問答をした幼い頃の自分をそこに見たからです。自分がお坊さんになる事を初めて明確に意識したあの日の幼い自分、今の自分に問いかけているように思えたのです。なりたいたい自分になれたのか、と。

あらためて「初心に帰る」とはいかなるものなのでしょう。ただ単に物事の最初の頃の気持ちを取り戻すことがこの言葉の真意なのでしょうか。

道元禅師は「菩提心」つまり「仏の道を学ぼう、それに従って生きよう」とい

う心は、何回も起こすのだと言われてます。「菩提心」を百万回起こしてこそ修行なのだとも言われました。

そして「初心」も同じように、帰るものではなく、何度も起こすものなのだ、ある老僧は言いました。

「過去の私」と「今の私」が立っている場所が同じでないことをしかと受け入れ、その上で再び初心を「今ここで」起こすこと。只漠然と過去を振り返りなぞるのではなく、まず現状をしっかりと見据えて自らの「今」の有り様を徹底的に問うことから始めるのが「初心に帰る」という言葉の真意であるというのです。

初めて頭を丸めたあの日から私がどのように変わろうとも、今の自分を受け入れ、脚下を省みるこの瞬間こそが初心であり、この一歩が常に最初の一歩なのだ。そう思えた時、老僧の言葉がストンと胸に落ちた気がしました。

全日程が終わり記念撮影の時、お母さんの隣でこぼれんばかりの笑顔を振りまく弁事和尚さんに労いの言葉をかけることが出来たとき、前に進めたように思えたのでした。

## 仏教の行事

### 托鉢



日本でも最近では見かけることが少なくなってきましたが、時々街頭で黒染めの衣に網代傘をかぶり、右手に鈴をもち左手に鉢をたずさえ、お経を読んでいる姿を見かけたことがあるかと思えます。「托鉢」と呼ばれる行為ですが、元々は僧侶として最も基本となる生活スタイルの一つでありました。

古代インド、お釈迦様の時代から続く修行方法ですが、その頃は樹木の下を住まいとし、食事は托鉢によると定められていました。一般の信者が僧侶に対して食べ物や物をあげること、「良いこと」をすること。そして、僧侶が自分の生命を支えるだけの食事を信者より施され、それを有り難くいただくという所に意味があるのです。

今も東南アジアのタイ、ミャンマー、カンボジアなどでは昔ながらに托鉢は行われています。



◆ 深澤亮道

## ひだまり書房



21世紀に生きる君たちへ  
著 司馬遼太郎  
英訳 ロバート・ミンツァー  
監訳 ドナルド・キーン

本書は、『竜馬がゆく』などの歴史小説の著者として名高い司馬遼太郎が小学生に向けて書いた一冊です。

タイトルである『21世紀に生きる君たちへ』には、20世紀に生きた著者の、未来（21世紀）に生まれて、生きていく子どもたちへの願いが込められています。

僅か四十ページの本。文体は小学生向けで非常に柔らかく、読みやすくなっています。また、大人が読んでも心の琴線に触れる箇所が目白押しです。

自分には厳しく、相手にはやさしく。そして、素直で賢く。たのもし君たち”になつて欲しい。人間は、社会をつくらせて生きている。社会とは、「支え合う仕組み」である。

他者を慈しむ心。その心を未来、そしてさらにその先へ繋げていって欲しい。そんな願いが伝わってきます。

◆ 田中仁秀